

開会式▶



去る十月二十二日から二十
六日まで、広島国際会議場
において第四回広島がんセ
ミナー国際シンポジウムとの共
催による国際細胞分化学会
(International Society of
Differentiation (ISD)) 第八回
国際会議(テーマ「発生生物
学、分化及びがん」二十一世
紀に向けて)を主催した。
世界最初の被爆都市広島に
おいて、今回のように世界か
らトップクラスの基礎・応用
生物学ならびに医学研究者が
一堂に会した学会開催は、お
そらくこれが初めてであり、
会期中、最新の研究データの
発表と極めて活発な討議が行
われた。

国際細胞分化学会、 第八回国際会議を主催して

医学部・病理学第一講座 ◆ 田原 榮一



第四回 広島がんセミナー 国際シンポジウム 十月二十二日

一九九〇年より広島市で開
かれていた広島がんセミナー
国際シンポジウムは、ISD
広島開催の母体となった組織
である。

本年は、ISDとの共催で、
新しい癌治療法として注目を
集める遺伝子療法について、
内外六名のトップクラスのシ
ンポジストによるシンポジウ
ム、ならびに、国立がんセン
ター研究所長寺田雅昭博士他
三名のパネリストを加えたパ
ネルディスカッションが開催
された。

シンポジウムでは、ADA
欠損症患者に対し世界で初め
て遺伝子治療を応用した米
国立がん研究所マイケル・ブ
レーズ博士が、次いで白血病
治療に本法を実際に応用試行
中のテキサス大学アルバー

ト・ダイセロート博士が講演
した。

また、パネルディスカッ
ションでは、高久史麿国際医
療センター院長および、テキ
サス大学M・D・アンダーソ
ンがんセンターイザシア・
フィドラー教授の二名の座長
を中心に、遺伝子治療の科学
的有用性、倫理性ならびに実
践応用における問題点等にポ
イントを絞り、活発な討議が
行われた。

その結果、現時点では遺伝
子治療が癌の治療の第一選択
とは言い難いが、癌の治療
を目的とした人体への遺伝子
導入技術は日進月歩であり、
また、その安全性、倫理性等
を考慮すると、十年後には、
その中心的役割を果たす技術
となりうる可能性があるとい
う結論に達した。

県議会議長松山俊宏氏、原田
康夫本学学長、RNA逆転写
酵素の発見者であるマサチュ
ーセッツ工科大学デビッド・
バルチモア博士、福原照明広
島県医師会長などご来賓のか
たがたからのご祝辞をいただ
いた。

また、歓談の途中には、原
田学長がオペラを披露され、
盛大なレセプションとなった。

国際細胞分化学会、 第八回国際会議

■第一日目 十月二十三日

藤田雄山広島県知事、平岡
敬広島市長、橋口収広島商工
会議所会頭ならびに、飯島宗
一元本学学長を迎えた開会式
に引き続き、ノーベル医学生
理学賞受賞者デビッド・バル
チモア博士の講演会が行われ、
生体の免疫系の調節を司るリ
ンパ球の分化の分子生物学的
機構の解明に関する最先端の
知見を紹介された。
また、午後には、細胞接着

■第二日目 十月二十四日

午前中四題のPlenary Lec-
turesでは、ユタ大学マリオ
・カペッチ博士が、ホメオボ
ックス遺伝子とプロト癌遺伝
子の働きを、遺伝子ノックア
ウトマウスを用いて概説、フ
ランスのニコル・ルドゥアラ
ン博士が、quail/chick キメ
ラ系を用いての脳と脊髄の発
生について、ハーバード大学
のダグラス・メルトン博士か
らは、中胚葉及び神経組織の



▶フエニックスホールでの
活発な討議風景

胚誘導において、activinによって誘導される follistatin が神経マーカーを誘導するという新しい知見が発表され、スクリップス研究所のピーター・ヴォークト博士が、発生調節因子としての *tin* 遺伝子の重要性について概説した。

これらの講演は、鳥類、カエル、マウスなどの動物で真なることは、ヒトでも真であり、ヒトの体がどのようにして出来上がるかという発生メカニズムを知ろうとするには、動物のそれを検索するのが正道であり、その異常ががんを含むヒトの病気の発生に結びつくことを示唆している。

午後二時から、本学会会長グロリア・ヘップナー博士（ウエインステート大学）の会長講演「腫瘍進展の細胞学的基礎」が行われた。ヘップナー博士は、近年日本でも増加傾向にある乳癌の細胞生物学の世界的権威であり、長年にわたる基礎的・臨床的研究成果を発表された。その後、発生生物学を中心としたシンポジウム三題が行われた。

■第三日目 十月二十五日

午前九時から、癌転移研究の世界的権威テキサス大学イザイア・フィドラー博士の講演が行われた。講演の中で、フィドラー博士は、癌の転移

が偶然に起こるものではなく、転移を引き起こす癌細胞と転移標的臓器との密接な相互作用が必要不可欠な要素である（いわゆる seed and soil theory）ことを、緻密な実験系を用いて証明してこられた成果を分かりやすい英語で明瞭に示された。これに引き続き、癌転移、癌の遺伝子異常等に関するシンポジウム六題が行われた。

■第四日目 十月二十六日

午前九時から、レチノイン酸を用いたがん分化誘導療法草分け的存在であるテキサス大学ウォン・キ・ホン博士の講演が行われた。その後、癌分化誘導療法等の三題のシンポジウムが行われた。

また、天野實前総合科学部長が座長の一人をつとめられたシンポジウム「両生類の正常発生と腫瘍」では、常陸宮正仁親王がシンポジストとしてご臨席され、理学部附属両生類研究施設西岡みどり教授との共同研究である、カエルに発生する膀胱癌に関するご研究の一端をご発表になった。また、シンポジウム後には、殿下は附属両生類研究施設を訪問され、川村智治郎元学長にも会見された。

以上、急ぎ足で今回の国際

学会を振り返ったが、最終的には、全世界二十五か国から基礎生物学から臨床医学までの千人を超える登録参加者が、幅広く、かつ最新のデータを持ち寄って集い、充実した討議を行えたものと自負している。

また、本学会の特色として、Young Researcher's Travel Award をもうけ、卓越した良い仕事をしている旧ソ連、ロシア、エストニアなどを含む世界中の若手の研究者に積極的に学会参加を呼びかけている点があげられる。学会三日目にキリンビール㈱のご厚意により安芸郡府中町の広島工場で開催した若手中心のビールパーティーでは、各国の若い研究者が国境を越えた交流の場を持つことができた。なお、四年後の第十回ISD国際会議（ヒューストン）では、田原が会長を務めることが、ISD理事会で決定された。

最後に、本国際学会を主催し、かつ成功裡に幕を閉じることが可能であったのは、ひとえに、原田学長をはじめとする地元広島大学諸関係者の、影に日向にの心温まるご協力の賜物であり、ここに深く御礼申し上げます。

（たはら・えいいち）



▶シンポジスト、座長、組織委員一同が集って